

幼児の表現遊びに関する学生の気づきについて

— 実習の場面での個人記録の省察を通して —

居原田 洋子

美作大学短期大学部

幼児の表現遊びにおける学生の学びを充実させるために、幼稚園教育実習後に、学生自身が保育に対して記録を通して分析的に取り組む過程が重要となる。どのような学びを得たかを把握し、記録に記載される思いを読み取ることで、援助の意図を学ぶために省察することの着目点を予め伝えることができれば、記録をとる意義を意識的に積極性の向上を図ることができると思う。

そこで本研究では、実習後に個人記録の実践の場を振り返り、省察することはどのように今後の保育に役立つかを調査する。調査方法は、教育実習の場面において、幼児と教師（または幼児と実習生）の表現遊びの場面の対話を記述し、それについて省察を記入させた。省察は今後の保育にどのように役立つと思うか自由記述式の質問法を用い回答をさせ内容を検討した。分析には **KHcoder** を用いた。

記述の語の出現回数、10 回以上の出現が見られた語を降順でまとめると、「幼児」「関わり」「考える」「役立つ」「今後」「理解」「援助」「場面」「省察」「対応」であった。こうした語が出現した理由には、幼児と関わる中で、幼児が何を考えていたか、どうしたかったのかを省察することによって、幼児の心を理解することができたり、同じ状況になった時、どう援助したらよいか役に立つと感じたと考えられ。

次に、出現語について共起ネットワークでは、出現回数について円の大きさを表現している。特徴的な点では、「文字」を書くことによって「改めて」「様子」を「客観」的に見ることができると思ったことや、「起こった」ことが「段階」を追って「把握」できたこと、「見守る」「力」や「見極める」「力がつく」ことに役立つと思ったことである。以上分析の結果から学生が省察することでどのような意義を得たか、またその課題について更に検討する。